



数と日本語

まず、クイズから。「一二三四五」と声に出してから、「五四三二一」と声に出してみてください。あれれ、何か違いはありませんか? — そう、違うのは「四」の発音。順に発音する場合はそのまゝ一続きでまとめて音読みで「し」と言う。しかし、逆さの順だと一つ一つの数字を別個に意識するので、発音のうえでも「よん」と言うのが普通だ。

「四」の発音はおもしろい。この背景には、「四」の音読みが「死」と同じになるのでそれを避けるということもある。まあ、「四者協議会」が「死者協議会」になったらちよつと嫌ですからね。

「四」といえば、「ひとつ、ふたつ」「みつつ、むつつ」「よつつ、やつつ」などの関係もおもしろい。なんと、日本語では、一と二、三と六、四と八、というように倍数関係は語形の一部(子音の部分)が共通しているのだ。遠い

昔、日本語を話していたご先祖さまたちは、なにげに「数」に深い理解があったようだ。ちなみに、万葉集にも、「十六」と書いて「しし」と読むなど、九九を利用した表記があった。

概数表現もおもしろい。日本語には、「二三人」「七八回」のように隣の数値を並べる言い方があって、曖昧に数を言うことができる。これはなかなか便利な表現で、「本当は四回だったっけな」と思いながらも、「いやあ、私も、忘れたことが三、四回あります」と、ちよつと小さいめにずらして見栄を張ったりできる。間違いではない。合法的に(?)、さりげなくええかつこしてごまかせちゃうのだ。

ところが、「十」が絡むとそれが言えない。「九、十人」「十、十一回」などという言い方はしないのである。では、どう言うか? 「九ないし十(人・回)」のように分解した言い方もあるが、慣用的にまとめて言うならば「十(人・

回)前後」のような言い方になる。十は一つの区切りとなる目印の数であり、この数については十を中心に、「九、十、十一」でワンセットになっているのだ。だから、「たしか、九回しか勝てなかったよな」と思っている、「いや、勝ったのは、十回前後ですわ」と言うのと「十一回」まで含むことになって大幅に得をする。

まあ、損か得かは別として、「十」はまさにまとまった数であり、十の場合はその中心に考えるんだぞ、という概数の考え方がしつかり日本語という言葉に反映されているのだ。もちろん、「約」「およそ」なども目印のまとまった数にしかつかない。概数としての表現上、約一千四十八字などとは言わない。

ということ、ここまで約一千字、読んでくださり、ありがとうございました!

早稲田大学教授

森山卓郎
もりやまたくろう